大好きな川だから 汚さずに付き合いたい

白根ヘラブナ釣り研究会　**武田紀生**さん

朝もやにかすむ鷲ノ木水門付近の大通川。新緑と静寂の中、太公望たちが竿を連ねます。市内で自営業を営む武田紀生さん（五十六歳・中央通四）もその一人。一年のうち半分は毎朝ここに来て、自然の中に身をゆだねます。

ヘラブナ釣り場としては全国でも有数の場所。釣り雑誌でたびたび特集が組まれるほどです。「野釣りでは県内ピカ一。新潟県のヘラ釣り師はほとんど来ているはずですよ」。ときには、四十センチ級の巨ベラが上がるといいます。

魚影の濃さもさることながら、周りの景色が武田さんにとってたまらない魅力。「この自然がまたいいんです。鳥もいっぱいいるし、騒音がない。朝なんて空気もきれいで最高です。この近辺でこれだけ自然が残っている所は他にないでしょう」。自宅から車でわずか十五分。武田さんの心の中では、だれに誇るでもない自慢の場所なのです。

そんな大好きな場所も、ここ十年間で、だいぶごみが目立つようになりました。空き缶、空き瓶、弁当のから、不法投棄されたタイヤ、乗り捨てられた車―。一部の人の心ない行動に、武田さんは胸を痛めてきました。「一般の人もそうですが、釣り人もマナーが悪くなりました。平気でものを捨てる。持ってきたものを持って帰る、それだけでいいのに」。

同じ趣味を持つ者として責任を感じた、武田さんをはじめヘラ研究会の皆さん。十年ほど前から市と協力して、年に何回か、水門一帯を一斉清掃することにしました。自らごみを拾い、釣り人にはごみ袋を配り、立て札も立てました。近隣のヘラ愛好会には文書でごみを捨てないようお願いもしています。それでも「毎回、車二～三台分のごみが集まる」と言います。

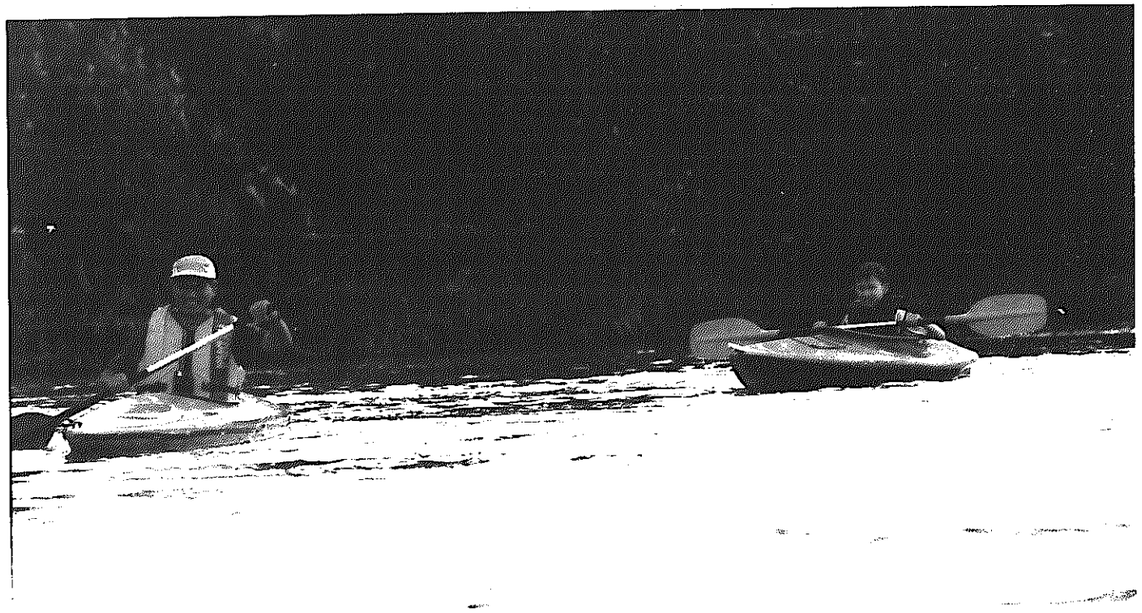
「きれいな所で釣れば、ホント気持ちがいいんだけどねえ」。白根ヘラ研の皆さんは、釣りに行くと、いつもごみ袋を満タンにして帰ってきます。

小さいころ、親子でよく釣りをしたという武田さん。「巻の鎧潟（まき）がマブナの宝庫でね。よくオヤジに連れていってもらった。楽しかった。大通川も子供たちの思い出の場所になってほしい」と言います。

釣りブームの今、たくさんの若い人や子供が鷲ノ木水門を訪れるようになりました。「ごみを捨てる子もいるが、子供の前で、平気でポンとごみを捨てるような大人も悪いんですよ。マナーさえ守っていれば、子供が釣りをする姿はいいですよねえ」。

午前七時、釣りを終えた武田さんが帰り支度を始めました。もちろん、手に下げた袋の中は、拾った空き缶やごみくずでいっぱいです。「さて、帰りましょうか」。武田さんは元気に笑いました。

「この自然がたまらない」と武田さんは言う▶



▲気分はまさにトム・ソーヤー。信濃川中流域は川面が広く、流れがゆるやか。堰堤もなく「カヌーツーリングには最適」と言われている。パドルを操る中村さん（左）。

治水、利水、次は遊水の時代ですね

信濃川リバーツーリングを主催　**中村和雄**さん

クイッ。パドル（かい）で水をひとかき、カヌーがゆっくり川面を滑り出します。迫る中州、あわてて飛び立つ水鳥、あっけにとられて眺める釣り人たち、何もかもが初体験。「すごい、すごい。白根でこんなことができるなんて」―。初めてパドルを握った参加者たち。興奮はなかなか納まりません。

七月、市民を対象に、信濃川リバーツーリングと題したカヌー体験教室が開かれました。行程は加茂市天神林から小須戸橋まで約十二キロ、三時間。県カヌー協会員の指導を受けながら、ときにはこぎ、疲れては休みと、のんびりと下っていきます。「いつもと違った目線で景色を見られるのがカヌーのいいところ」と、主催した中村和雄さん（道潟・四十五歳）。「腰のすぐわきは水が流れ、周りにはたくさんの生き物たち。自然を満喫できるんです」と言います。

二十年以上も前からオリエンテーリングや自転車など、自然に親しんできた中村さん。カヌーは五年ほど前から始めました。今はカヌー協会の皆さんと、得意のオリエンテーリングとカヌーを組み合わせた催しを計画中。「秋に、フルーツカップと題してやろうかなと。この白根で、信濃川を思いきり楽しもうと思ってね」。今回の教室はその下調べも兼ねています。

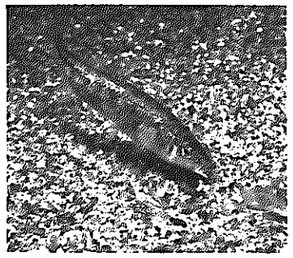
「川の自然は素晴らしいじゃないですか。白根は今まで治水、利水ばかり考えていたでしょう。今度は遊水の時代だと思うんですよ」。日差しに目を細めながら、にっこりと笑いました。

●知っていますか？ 新潟の春告げ魚 イトヨ

体長五センチほどの小さな魚イトヨは、昔、市内の用水堀や小川などでも見かけることができました。今でも、春には信濃川や中ノ口川を上ってきますが、その数は減少してきています。

日本のイトヨは、海へ降りる降海型と内地のみで生息する陸封型に分けられます。陸封型は本州のわずかな盆地などにしか生息せず、天然記念物に指定されています。市内で見られるのは降海型で、北陸や東北、北海道に分布します。新潟県では、成長期を海で過ごした成魚が二月から四月ころ川を上り、流れのゆるやかな小川などの底に植物の繊維を集めて巣を作り、産卵します。一週間ほどでふ化した稚魚は、初夏になると群れをなして海へ下ります。同じころ、親魚は一年の短い生涯を終えます。

空揚げにすると美味ですが、イトヨを食するのは全国的にも新潟県だけと言われています。春になると姿を現すことから「春告げ魚」の異名を持っていて、その釣りや刺網漁の風景は、新潟の春の風物詩として昔から親しまれてきました。しかしながら水路の護岸化による産卵場所の減少を主な原因として、その数は減る一方。春の風物詩も失われようとしています。



▲巣を作るため藻を運ぶイトヨの雄。右下が巣

写真提供・取材協力
＝マリンピア日本海